

## 手 労 研 と 中 学 校 の 手 の 労 働 の 実 践

名古屋大学 森 下 一 期

手労研ではここ三、四年意識的に青年期、特に青年前期の中学生の労働教育の問題に取り組もうとしてきている。活動計画にも盛り込んできているが、それは、第一には、近年の教育荒廃の進行の中で1970年代末から顕在化してきた中学生の学校内、家庭内暴力にみられるような、人格の破壊ともいえる深刻な状況が現われてきたところにある。労働、あるいは手の労働の教育はこれらの問題状況に切り込む有効な取り組みであり、さらに青年の自立をはかるには不可欠の分野あると考え、労働の教育を前面に押し出して研究、実践している手労研がこれらの問題に真正面から取り組む必要性を感じたのである。第二に、それまで乳幼児期、児童期の子どもたちの遊び、手の労働の実践、研究を主として進めてきたが、目の前の子どもたちが青年期に達したときの姿を見通して教える必要もあるだろう、そのためにも中学生、あるいはその上の青年たちを知り、そこにおける労働の問題を考えたいというところにあったといえる。

だが、このような方向性は、ごく最近でできたのではなく、手労研発足後比較的早くから出されていた。中学校における労働、手の労働の教育を特集した機会に、この分野における手労研の実践を会報を中心にふりかえり、今後の課題などを検討してみたい。

### 社会的生産労働への参加を

手の労働の教育の構造は、手労研内でしばしば取り上げられるが、それは1977年の第四回大会基調報告で提起されたものが基本となっている。その内容は

- (1) 遊び的労働……学級園づくり、稲づくり、こいのぼり作りなど。
- (2) 仕事……掃除、食事の準備、後かたづけなど。

(3) 技術・技能の学習……工作科や技術科での学習。

(4) 社会的生産労働への参加……生産実習など、生産の現場での労働教育。

であった。

このときから第四の分野である社会的生産労働への参加を、本格的に行なうのは青年期の課題であると位置づけながら、視野の中においていた。実践としても、会報46号(1977年6月号)に、「新しい修学旅行を一労働実習を中心にした卒業旅行一」(拙稿)が報告されている。これは、中学生が飛騨高山で、家具工場、農業、家畜飼育、陶芸等に分散して数日間労働実習をするというものであった。

中学生の年齢で生産の現場に入って実習をするということは、戦前や戦後も早い時期には比較的良好に行なわれていたようである。ただそれは職業指導の一環として、職業準備の色彩が強かったといえる(戦前のものは、農作業も含め勤労精神の育成にねらいがおかれていた)。だが、否定面にしろ、積極面にしろそれらの取り組みの意味が十分に検討されることなく、進学率の上昇とともに、職業や労働に関わる教育は影をひそめてきた(技術科といった教科さえ、生産よりも消費生活に焦点が当てられている)。他方で、子どもたちの生活からも労働がなくなり、おとなの労働を目の当たりにする事もなく、中学生になっても職業についての知識もイメージも持たない子どもたちが増えてきた。青年が自立していく上で、労働や職業の問題を考え、自己の進む道を選択することは避けて通れないところである。したがって、上記のように子どもたちから労働や職業が見えにくくなっているなら、余計に学校で年齢に見合った形で、労働や職業に関する教育が行なわれなければならないはずである。だが、実際は逆に進

んでいた。

このような中で、新しい視点で労働実習、生産実習が模索されてきた。上記の和光中の実践だけでなく、長野県あるいは秋田県に出かけていって農業実習をするといった実践が前後してでてきたのが1970年代の中頃からだろう。これは、都会地の子どもたちを地方に連れていき労働の体験をさせるという形をとっているが、都会という条件の中では中学生が行なうことが可能で、理解できる生産の現場を得ることができないところからでてきたのだろう。多くは農業労働を取り上げているが、一部にみられる工場労働も何が可能か検討される必要がある。この種の実践だけでなく、地域の課題と結びつけた労働の教育の取り組みも模索されてきた。植林地の下刈を取り入れた恵那の実践、漁業の理解を体験的にさせようとする京都伊根町の実践などが思い出される。

これらの実践は個人の範囲で行なわれたものはほとんどない。学校や学年全体取り組みなので、多くが長期にわたって継続的に行なわれている。手労研として、これらの実践を集約し、社会的生産実習を教育的に組織していく上での原則を提起できるようになりたいものである。

### 中学生にも手づくりを、直接経験を

会報にはその後中学生の社会的生産労働への参加の実践は掲載されていない。むしろ、遊び的労働といえるものを中学校に取り入れた実践が報告されている。会報103号(1982年3月号)「伝承的手作りをとり入れた文化祭」、161号(1987年1月号)「中学生の教室の文化活動」はともに土井康作さんの町田市成瀬台中の時の実践である。土井さんは成瀬台中が最も荒れていた時期に生徒会指導にたずさわって、新しい文化祭の創造に取り組んだ。多くの学校が、退廃文化にのみこまれ、模擬店、お化け屋敷、バンド演奏一色となっている中で、「見る」文化祭から、「する」文化祭への転換をはかり、社会文化、精神文化とならんで技術文化を取り

上げようとした。そして、「手づくり」部門を設けて行くが、生徒会役員との原案づくり、討議の過程など会報に詳しく述べられている。土井さんは、山形・天竜二中の文化祭の実践に学んだとしているが、それは地域に目を向けさせるため、伝承文化の一つである手づくりを取り入れた先進的な実践であった。成瀬台中では、手づくり部門を希望者が参加するようにしたが、年々希望者が増え、半数以上参加しているという。生徒の感想にもわら草履や竹細工をやることのできた喜びと楽しさが表現されている。手づくりを取り入れることは、必然的にいろいろな関わりを広げて行くようである。教師にできないところは、親に依頼し、そこのつながりを深めて行く。さらに伝承的な手づくりであればお年寄りに期待することとなる。成瀬台中では、近所の老人ホームとの交流を深める場となった。

「教室の文化活動」の方は、七夕の飾り付けをクラスごとに行なったというものだが、義務づけなくとも全クラスが取り組み、短冊に願い事を書くときには和やかな雰囲気だったという。日本の伝承的な祭りの世界をふれさせることによって、ふだん緊張し、いらだっている中学生にも気持ちの余裕をもたせることができることを示している。

二つの実践はともに社会的生産労働といった肩の張ったものではないし、作っているものとしては小学生でも行なっているものが多い。しかし、だから中学生では陳腐で無意味だということにはならない。第一には、現代の中学生は小学校時代の工作経験がきわめて少なくなっている。特に生活の中でもものを作ることは極端に減少しているだろう。だから、竹とんぼ、わらぞうりといったごくありふれたものでも中学生にとっては新鮮な手づくりとなる。否、高校生でも、大学生でもおなじことがいえるだろう。第二に、ものを作ることは、材料や加工法についての知識、技を必要とする。一度経験すれば終わりというものではない。たくさん作ること

によって技を高まり、作品のできばえが満足いくものとなる。この点は、中学生、高校生と、年齢が上の方がより強く追求するところだろう。このような意味で中学生に手づくり工作を取り入れることは単なる小学校の焼き直しではない。むしろ中学生の時期だからこそ、もっと手づくりを取り入れる必要があるといった積極的な問題提起がなされているといえる。それは手づくりを通して、人のつながりをつくって行くところにある。技や作り方を教え合い、学び合う中には人間的な豊かな関わり方がみられるからであろう。この点では、世田谷区の児童館の川口さんが、竹とんぼや豚汁をつくりながらだと中学生のつっぱりたちともいろいろな話ができる、作ることを通して児童館を彼らの駆け込み寺にしたい、と報告したことがあるが、同じ視点に立っているように思う。

土井さんの実践では、もう一つ重要な教訓がある。ただ手づくりをさせたということではない。現代の中学生の特質をつかみ、全員が一斉に行なうということではなく、関心のあるものから輪を広げて行く方式を取ったことである。土井さんは、「この指とまれ方式」と呼んでいるが、興味や関心が多様化してくる年代には大事な方法の一つだろう。もちろん全員一致して取り組み、集団の力を認識するために、集団討議を深めることも重要である。しかし、すべてが全員で行なわなければならないものではなからう。特に、経験しなければ楽しさや喜びが実感できないものは、時間をかけて、一方の子ども喜びの中に他を引き込んでいくという方法は有効だし、本来そうあらねばならないだろう。

#### 単なるものづくりに終わらせぬことを

中学生にとっても、手づくりやものづくりが大事になっていることを強調してきたが、会報167号(1987年7月号)「授業の風景」(鈴木隆司)は、教科の授業の面から中学生のものづくりの意味を検討している。鈴木さんは、技術科の授業が「ものづくり」に終わっていて、学ぶ

場になっていないことを問題にする。技術科においても教えるべき中味を明らかにし、子どもたちに提起するならば確実に身につけて行くことを、流体力学の授業と紙飛行機の製作を通して示している。そして、ものづくりに「どうして」「なぜ」がなければ技術科の授業にならないと指摘している。

以前から、技術科はものを作ることを通して学ぶという考えが強かった。学習指導要領がそのルールを敷いていた。そのうえ、中学校が荒れてきて教室の授業が成立しにくくなるというそのものづくりになされ、それを通して学ぶものさえ流されてしまった感がある。鈴木さんはそういった状況をきびしく批判し乗り越える方向を示したといえる。教科の学習のねらい、行事のような教科外の活動のねらいはそれぞれの性格によって立てられなければならないだろう。しかし、教科外の活動であっても、ものづくりは技術、技能を要する。身につけ、知るべきものを教える場が保障されなければ、作ることもその喜びも味合うことができないだろう。作ることだけの強調に終わらぬようにして行かねばならない。一方、授業においても、受けているのは工作経験の少なくなった生徒である。学習の中味を明確にし、教えることと同時に、もの作りをその中味と密接に関連させながら、正当に位置づけることも重要な課題であろう。そのとき、教える中味としては、知識のみでなく技能も含まれることを強調しておきたい。

会報に報告された実践を時期をおって取り上げきた。報告は決して多くはなかったが、中学校における手の労働の教育の主要な課題に真正面から取り組んで来ているといえるのではないだろうか。今後、実践を広げ、深めていくことが課題であろう。なお、大会の分科会討議やサークルでの報告まで検討することができなかった。それを考えるなら手労研での中学校の実践はここに示した以上に豊かであるといえるだろう。